

# 午後の遺言状

映画文学人生論

原作・脚色：新藤兼人 (1995年)』

監督：新藤兼人 (1995年)

出演：森本容子 杉村春子  
柳川豊子 乙羽信子  
牛国登美江 朝霧鏡子  
牛国藤八郎 観世栄夫

撮影：三宅義行

音楽：林光

森本三郎 津川雅彦  
柳川あけみ 瀬尾智美

おら、罪の意識ねえだよ

人間は生老病死の運命をまぬがれることができない。誰でも、美しい女優でさえも——その事実を映像を通じて容赦なく伝え、人生の無常、ああ無情をしみじみと考えさせる——新藤兼人監督の『午後の遺言状』はそんな映画だ。

あえて老醜をさらして主演女優賞と助演女優賞に輝いたのは杉村春子と乙羽信子、それに痴呆老女役の朝霧鏡子が競演した。乙羽信子は現実に肝臓ガンが進行中、この映画が遺作になった。

映画では大物女優森本容子（杉村春子）が所有する蓼科高原の別荘の管理人柳川豊子を乙羽信子が演じている。豊子の一人娘あけみ（瀬尾智美）が結婚することになったところで、実はあけみは蓉子の亡夫三郎（津川雅彦）との子供だったと告白する。容子は激怒して豊子の不倫行為をなじるが、「おら、罪の意識ねえだよ」と豊子はあっけらかんとしている。

これは乙羽信子の若い頃のイメージとは違う。「百万ドルのえくぼ」というキャッチフレーズで人気のあった清純派女優である。新藤兼人の第一回監督作品『愛妻物語』では、貧しいシナリオライターの夫を陰で支える妻を好演。その後、近代映画協会の同人として新藤と行動をともにしている。『原爆の子』『縮図』『裸の島』などの新藤監督作品やNHKのドラマ『おしん』では逆境を生き抜く忍耐強い日本人的女性を演じた。

# 午後の遺言状

映画文学人生論



山本周五郎原作、新藤兼人脚本の映画『青べか物語』では、蒸気河岸の先生が間借りしている古い作りの二階屋のきみのという名前のおかみさんの役だ。どう猛な風貌の夫の増さん（山茶花究）に暴力をふるわれて、足が不自由になったが、毎日、けなげに貝むきの仕事をしている。

そんなきみに対して増さんはやさしい態度をとるようになり、台所でめしを炊いて、おかずをつくり、さらに銭湯まで背負って行って、女湯で体を洗ってやる。「私はこれほど女房につくす亭主をみたことがない」と蒸気河岸の先生はいう。ただし、これは映画シナリオだけの話である。原作の先生はそんなことは言っていないし、そもそも増さんの家に間借りしていない。

シナリオ作者の新藤兼人が乙羽信子のイメージにあわせて勝手に改作したのだろう。彼女が『青べか物語』できみを演じたのは三十八歳、新藤兼人と結婚したのは五十四歳、『午後の遺言状』を撮り終えて、亡くなったのは七十歳だが、結婚後も、新藤のことを先生と呼んでいたという。

そんな彼女にもこわい一面があることを演技でみせてくれたのは新藤兼人監督の『鬼婆』。通りかかった侍を殺して、身につけているものをすべて剥いで死体を深い穴へ捨てた。外面如菩薩、内面如夜叉の幻惑。「おら罪の意識ねえだよ」。

貝をむく女に罪の意識なし